

子どもを支えるために

～子どもを共に支える保護者と学校のよりよい関係づくり～

生徒指導・特別支援教育部 専門主事 小林 里恵子 市村 宣幸 染川 あゆみ
山岸 俊朗

研究協力校 松本市立旭町小学校 茅野市立永明中学校

要旨

生徒指導・特別支援教育部では、子どもを支えるために、保護者と学校*、関係機関等を「つなぐ」教育相談を行っている。本来、保護者と学校は共に子どもを支える関係であるが、本年度の相談では両者の意識や子どもの捉えにずれ**があることが多かった。そこで本研究では、教育相談の実際から課題解決のポイントの分析を行い、両者の意識や捉えのずれの原因とその解消に向けての方法を探った。その結果、意識や捉えのずれの原因の多くには「丁寧な対応」と「共通理解」の不足があることが見えてきた。そこで、保護者と学校が子どもを共に支えるよりよい関係をつくるために、校内で使える「丁寧な対応」「共通理解」に向けたロールプレイング研修や校内連携マップの整理、記録シートの開発を行った。

I はじめに

昨年度、「子どもを支えるために～子ども理解を考える～」をテーマとして研究を行った。その結果、子どもを支えるためには、学校が子どもを理解し、指導・支援に関する考えを基に、保護者と前向きな連携をしながらチーム（校内外の関係者）で共通理解を図ることが必要だと分かった。

本年度、生徒指導・特別支援教育部の教育相談では、保護者からだけでなく、学校からの教育相談が増加した。教育相談では「子どもが困っている」ことを念頭に、「保護者や学校の気持ちを丁寧に聴き保護者と学校、関係機関等をつなぐ」を基本姿勢として対応している。私たちが「つなぐ」中で実感したのは、保護者も学校もそれぞれができることを精一杯やっているが、互いの意識や子どもの捉えにずれがあり、同じ方向で対応していないことだった。また、保護者と学校が互いの考えを主張し合うことで話し合いが本筋から外れ**、対応が長期化・複雑化するケースもあった。

子どもに関わる課題を解決するためには、保護者と学校が、よりよい関係をつくり、同一歩調で対応することが基本である。

そこで、私たちが実施している教育相談を基に、保護者と学校が共通理解し、子どもを共に支えるよりよい関係をつくり、子どもを中心に丁寧な対応ができる方法を提案したいと考えた。

* 本研究では「学校」＝「学校の組織全体」を指す。

** 本研究では、意識や捉え等のずれを「ずれ」、話し合いの論点がずれることを「外れる」と表現する。

II 研究の方法と内容

教育相談の内容の傾向を分析することにより、保護者と学校との間にある「ずれ」の原因を特定し、解決方法について検討した。

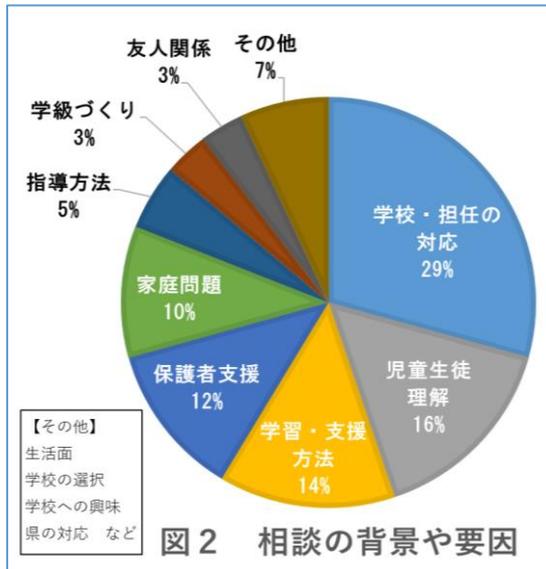
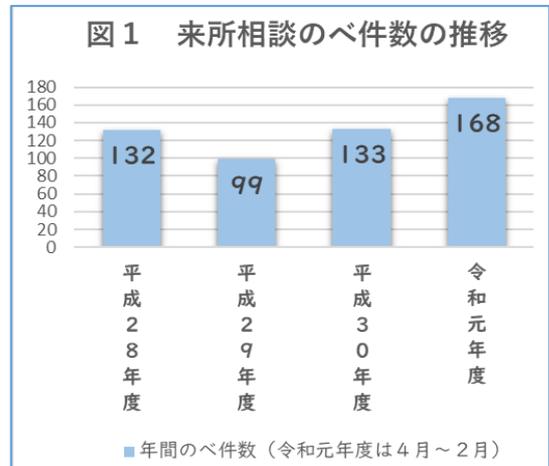
1 教育相談内容の分析

教育相談は、電話相談やメール相談、来所相談によって行っている。

本年度の来所相談は 168 件（のべ件数）（平成 31 年 4 月～令和 2 年 2 月）で、ここ 3 年と比べると増加している<図 1 参照>。相談期間は 1 ヶ月～数年間に渡っている事例・事案もあり、支援会議への出席要請も増えている。

○ 相談の背景や要因 <図 2 参照>

時間をかけて保護者の話をじっくり聴いていくと、初めは当該児童生徒の状況についての相談と思われたものが、実は学校・担任の対応に納得していないという事案が多数見られた。そこで、保護者が相談したいと思った内容の背景や要因を探った。



【図 2 より】

- ・最も多かったのが「学校・担任の対応」に対するもので 3 割近くを占める。
- ・学校に関わる「児童生徒理解」「学習・支援方法」「指導方法」を合わせると 3 割を超える。
- ・保護者に関わる「保護者支援」「家庭問題」も 2 割を超える。

【具体例】

- ・「学校・担任の対応」では、子どもや保護者が学校・担任に相談した際の初期対応が不適切だったり一方的だったりして長期化・複雑化したケースが多くあった。また、関係者間での共通理解不足や対応の違いなどから、子どもや保護者から不信感をもたれるようなケースもある。
- ・「児童生徒理解」「学習・支援方法」「指導方法」については、学校・担任が発達障がいのある児童生徒への理解が不十分なために適切な対応ができなかったり、不登校の児童生徒の気持ちに十分寄り添えなかったりしたケースが多かった。学校・担任は、子ども理解や指導・支援方法など、子どもと関わるための専門性をさらに身に付ける必要があると考える。

・「保護者支援」「家庭問題」については、保護者による子どもへの過干渉や過保護、コミュニケーション不足などの家庭内の問題が多く見られ、保護者への支援も重要な課題の一つであると言える。

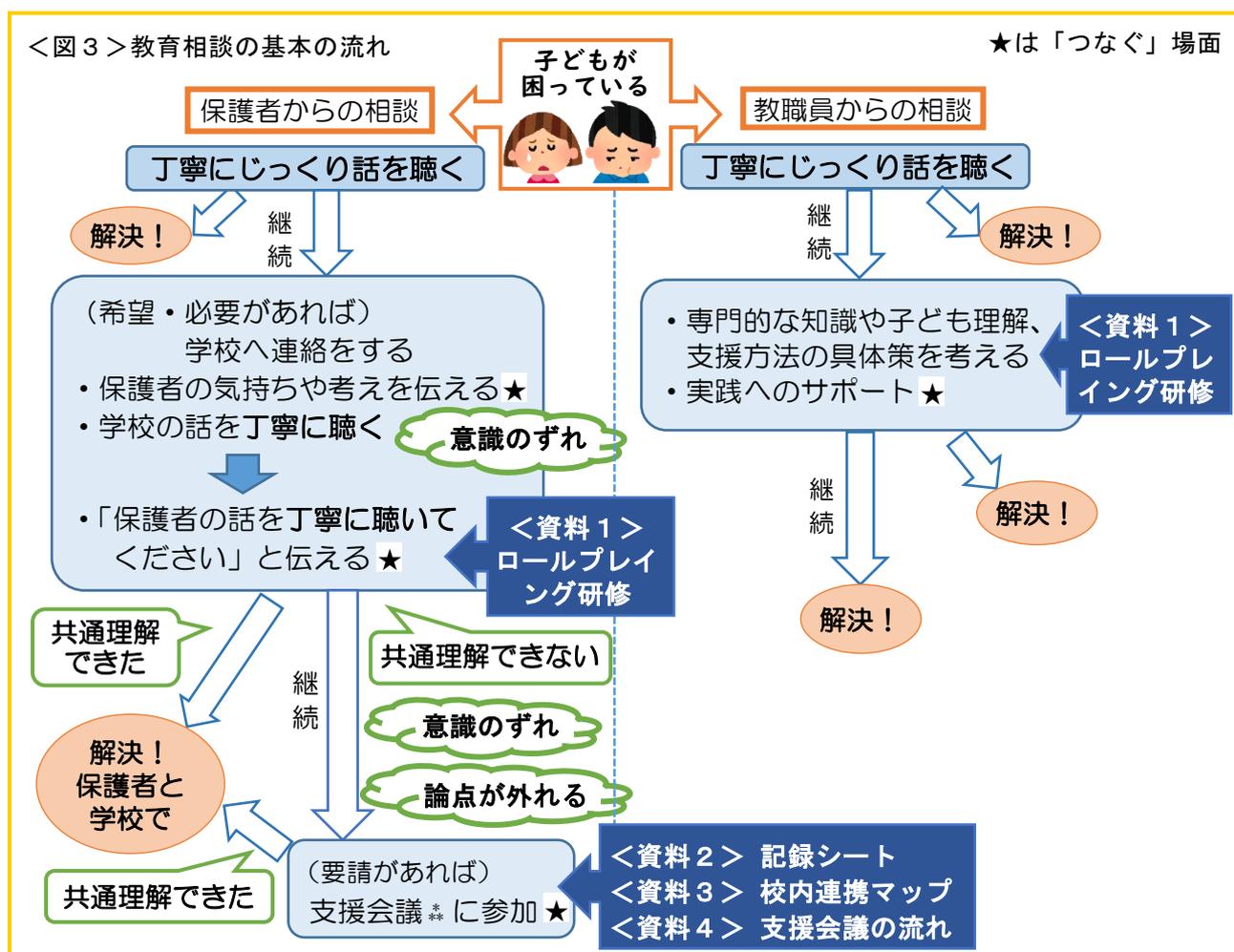
・少数ではあるが、「学級づくり」や「友人関係」では、学級全体が落ち着かない、騒がしい子に圧倒されてしまうなど、当該児童生徒を取り巻く環境に課題があることがうかがわれる。

子どもや保護者と学校・担任との間でよりよい関係が構築できていれば、多くの課題は未然に防ぐことができ課題解決にもつながりやすいが、実際は難しいのが現状である。そこで、これまで当センターで行ってきた教育相談により、多くの事案が改善されてきていることを踏まえると、課題を未然に防ぎ、子どもや保護者と学校・担任とがよりよい関係を築くために留意すべきポイントがあるのではないかと考え、それらをまとめて提案することとした。

2 子どもや保護者と学校とのよりよい関係のつくり方

(1) 保護者と学校・担任とのずれや外れが生じる場面 <図3参照>

当センターで行っている教育相談の基本の対応である「子どもが困っている」「関係者の話を丁寧に聴く」「つなぐ(★印)」の3点を基に整理したものが<図3>である。



* 「支援会議」については、「支援会議」「ケース会議」「関係者会議」等があるが、本研究ではまとめて「支援会議」と表記する。

<図3>で、課題の解決につながっている場面は、「丁寧に話を聞く」「共通理解できた」である。学校・担任が保護者の話を丁寧に聞いていないときや共通理解できていないときに、マークで示した意識や捉えのずれが起こったり話し合いの論点が外れたりしていると考えられる。

(2) 基本の流れから見えた課題と解決のためのポイント

教育相談で、特に大切にしたい課題解決につながる基本的な姿勢は、学校の保護者に対する「丁寧な対応」と、学校と保護者の「共通理解」である。この2点について対応のポイントを整理した。

【丁寧な対応のポイント】

- 児童生徒や保護者の気持ちや訴えを受け止めて、最後まで言い分を聴く。
- 話の背景から本当に伝えたいことを捉える。
- 事実をより正確に把握し、話を整理する。
- 対応を焦らず、不明・不安な点を十分確認する。
- (対応に非があると考える場合は) 心を込めて謝罪する。

【共通理解のポイント】

- 気持ちや考え方が異なるのは、立場や見方の違いによるものであり、どちらが正しいということではないということを理解する。
- 子どもを支えるという共通の目標によって協力し合えると考ええる。
- 同じ方向や計画に向かって互いにできることを無理せず行う。
- 保護者とこまめに連絡を取り合って進める。

この「丁寧な対応」と「共通理解」の2点は、保護者と学校・担任とよりよい関係をつくる上でも、重要であり基本的な姿勢であると考えられる。長期化・複雑化しているケースであっても、互いの立場や子どもの捉え方のずれを理解し、丁寧な話し合いをして、共通理解していけば、解決の方向に向かうことが多い。また、保護者と学校・担任が「子どもを共に支える」という意識で一致していることも重要である。

そこで、学校が保護者とよりよい関係をつくったり、子ども理解を深めたりすることを支援するロールプレイング研修と記録シート、校内連携マップ、支援会議の流れを作成した。

① 丁寧な対応につなげるロールプレイング^{**}研修 <資料1参照>

保護者からの相談では、丁寧に話を聴いて考え方や意識や捉えのずれが起こらないようにすることが大切である。このロールプレイング研修は、教職員が相手の気持ちを理解したり自分では気づかない対応の課題に気づいたりして、保護者にどう関わったらいいのかを考えてもらうためのものである。

^{**} ロールプレイングは、洞察力や対人関係上の問題解決能力を高める効果があると言われている。保護者の訴えの裏にある子どもや学校・担任に対する期待や願いをくみ取り、基本的な対応のポイントを明確にすること、さらにロールプレイング研修での実感を基に自分でよりよい対応を考えることが期待できる。

② 子ども、保護者、学校をつなぐ

「子ども理解と支援のための記録シート」と「支援会議の流れ」

子どもを中心に据えた支援会議になると、保護者と学校・担任が子どもの状態や困っていることについて共通理解し、役割を決めて支援の方向を建設的に話し合うことが可能になるだろう。

【子ども理解と支援のための記録シート】 <資料2参照>

記録シートに記載されている項目に沿って教職員で話し合うことにより、子どもを中心に据えた実態把握と支援の方向が明確になると考える。また、教職員で話し合われた内容を記録したり、保護者が加わった支援会議で活用したりすることで、保護者と学校・担任が足並みをそろえて、子どものよりよい支援につながることを期待できる。

【校内連携マップと支援会議の流れの活用】

・校内連携マップ <資料3参照>

校内で起きる、子どもに関わる課題について、早期の情報収集と情報伝達、素早い対応が課題解決の重要なポイントになる。そのために、対応する人や連携する人などを明確にし、組織的な対応ができるようにする。

・支援会議の流れ <資料4参照>

支援が必要な子どもを早期に把握し、教職員間で共通理解したり、保護者や関係機関との連携を推進したりする際に活用できる。支援会議の流れを端的に示した解説図であり、支援会議を早期に、日常的に推進していくことが期待できる。

これらの図やシートを学校の実情に応じて修正・作成し、年度当初の教職員が集まる職員会議等で確認したり活用したりしていくことで、子どものための校内支援体制、保護者とのよりよい関係が構築できると考える。

Ⅲ 終わりに

教育相談の内容から、学校・担任が保護者とよりよく連携するためには、子どもを捉える教職員の意識改革が必要だと考える。そこで本年度は、教育相談の分析を行い、学校・担任が保護者とよりよい関係を構築するための「丁寧な対応」と「共通理解」の基本的な姿勢をキーワードに、ロールプレイング研修や記録シート、支援会議の流れ等を作成し提案した。このような取組については、これまでも書籍等で幅広くたくさん紹介されているが、本研究では、教育相談の中から必要な内容に絞って提案したことで、研修や支援会議などで有効に使ってもらえる内容になったと考える。

生徒指導・特別支援教育部では、2年間「子どもを支える」をテーマとして研究を行ってきた。現在、子どもや保護者、学校・担任を取り巻く状況は、多様化・情報化などによって以前とは大きく異なり、新しい課題も多くなっており、教育相談に求められる専門的な知見や技術も常に見直す

必要がある。みんなで「子どもを支える」ために、保護者と学校が子どもを中心に据えて、互いにできることを考えて共通理解しながらよりよい関係づくりをしていけるように支えていきたい。

最後になりましたが、研究協力校である茅野市立永明中学校には、校内支援体制のアイデアをいただき、校内連携マップや支援会議の流れの作成の参考にさせていただきました。また、松本市立旭町小学校には、記録シートを使った子どもの実態把握へのご意見等、子ども理解と支援のためのよりよい記録シートの開発にお力添えをいただきました。心より感謝申し上げます。

※ 参考文献

「保護者トラブルを生まない学校経営を保護者の目線で考えました」永堀 宏美 著 教育開発研究所 2018

「カウンセリング・テクニックで高める『教師力』⑤ 教師のチーム力を高めるカウンセリング」

諸富祥彦 編集代表 株式会社ぎょうせい 2011

「演じることで気づきが生まれるロールプレイング」丸山 隆・八島 禎宏 著 学事出版 2006

「月刊 学校教育相談」 2019 5月号